



## 「沙弥教信と加古川」

教信という人物をご存知でしょうか。日本仏教界においては、さまざまな高僧に多大なる影響を与えている僧侶です。一遍や親鸞は、理想の念仏聖として崇拝しました。『今昔物語』をはじめとする説話集や謡曲『野口判官』などの文学作品に多く取り上げられています。

詳しいことはわからない部分が多く、興福寺の僧を務めた後、賀古駅家の北辺に庵を建て、永住の地としたとされます。沙弥と称されるのは、妻があり、俗人と交わって暮らしたことによります。現在の念仏山教信寺の前の道が西国街道であった

ことから、旅人の荷物を運んだり、農作業の手伝い、寺の南側のうまがいけ 駒ヶ池の造成を助けたりして生計を立てていました。念仏を唱えれば、極楽往生を遂げられるとした「称名念仏」の先駆者といわれます。当時の人々は彼を「阿弥陀丸」と呼んだといわれています。

彼を有名にしているのが、『日本往生極楽記』の記事です。貞治 8 年(866)8 月 15 日勝尾寺(大阪府箕面市)の僧勝如の夢枕に教信が立ち、「念仏により極楽往生を遂げた」と伝えます。弟子を現地に赴かせると、遺言どおり、遺体を野にさらしていました。首から上だけは無傷であったといわれます。現在、兵庫県指定文化財となっている沙弥教信上人頭像は、開山堂本尊として祀られています。毎年 9 月 13 日から 15 日まで開帳されています。



特に時宗開基の一遍上人は、正応 2 年(1289)6 月阿波の大鳥の里の川辺で発病、7 月に淡路に渡り、7 月 18 日明石に到着し、死地を求めて教信寺を再訪する途中、兵庫津の観音堂(のちの真光寺)で没したとされています。

室町時代、教信寺は堂宇 13、僧坊 48 の大伽藍を保ち、大勢力を誇っていました。しかし、天正 6 年(1578)秀吉の三木合戦のため、全焼するにいたります。江戸時代に再興され、現在の状態に落ち着いています。